



ペルーという国

マチュ・ピチュやナスカの地上絵をはじめ、エキゾチックな観光資源を数多く擁するペルー。文化遺産7件、自然遺産2件、複合遺産2件が世界遺産登録されている。日本からの直行便はなく、ロサンゼルスなどを経由しての長い旅を余儀なくされるものの、多くの旅人の心を惹きつけてやまない国だ。

日本とは1873年に日秘修交通商航海仮条約を締結。ペルーは南米でいちばん最初に日本との国



クスコ全景

交を樹立した国でもある。日系人は8万人から10万人といわれているが、正式移民の開始は1899年でブラジルよりも早い。

1990年には世界でも初めての日系人大統領、アルベルト・フジモリ氏が政権の座についた。市場経済に基づいた経済政策に転換させ、インフレの解消、国際金融社会復帰、外資導入、テロの撲滅などの改革を敢行し、ペルーは徐々に安定、近代化の道を進み始める。後任の大統領アレハンドロ・トレド、2006年に2度目の大統領就任となったアラン・ガルシアも、フジモリ政権と同様の経済政策をとり、ペルー経済も軌道に乗ってきた。現在、マクロ経済指標は非常に良好で、ここ7年間の経済成長率は平均6%、昨年(2010年)は9%の成長を達成した。

観光のイメージが強い国だが、ペ



ナスカの地上絵(ハチドリ)

ルーが世界でもトップクラスの産出量を誇る産品は少なくない。銀は世界一の生産量で、世界全体の17%を占めるほどだ。このほか鉱物では銅や鉛、亜鉛、スズ、モリブデン、そして金も世界有数の規模である。また、世界中で盛んになってきた栽培漁業に不可欠なフィッシュミール(魚粉)も、ペルーが第1位。農産物ではアスパラガス、パプリカをはじめ、有機コーヒー、生鮮マンゴー、アボカド、ブドウなども有力だ。ユニークなものでは、インカ帝国時代から衣服や装飾品の着色に利用され、現在では多くの国で食品の着色料として利用されているコチニール色素がある。原料のコチニールは、世界の生産量の80%以上がペルーだ。



マチュ・ピチュとリマ

リマ稲門会について

会の紹介

昨年設立40周年を迎えたリマ稲門会。1970年の設立当初、ペルーに駐在していた37名の校友により発会した。竹井淳吉初代会長の邸宅では、駐ペルー日本大使や韓国大使、日本からの現地進出企業、商社関係者など100名以上が参加して盛大な発会式が催された。

この40年間、ペルーでは8人の大統領が政権を担当してきたが、政策の振り幅は大きく、経済政策も大いに揺れ動いてきた。700~800%に達するハイパーインフレ、JICAの日本人専門家殺害事件など暗いニュースが続いていたが、1996年に起きた在ペルー日本大使公邸占拠事件には4名の校友が巻き込まれる。なかでも岩本匡司リマ稲門会会長・トーマス駐在員事務所長と宮下昭ペルー三菱商事社長(いずれも当時)は、127日間をわたり人質となった。

リマ稲門会の活動も、激動するペルーの社会情勢に翻弄されてきた。会員数も少ないときには10名以下にまで減少。昨年の設立40周年を感無量の思いで迎えた会員も少なくない。



リマ市。マヨール広場とカテドラル

会長メッセージ

ペルーはテロなどがあり大変危険な国だとの印象を持っておられると思いますが、それは間違いです。泥棒などの一般犯罪はあるものの、テロはほとんど撲滅され、治安はほかのラテンアメリカ諸国に比べても大変よくなりました。

マチュ・ピチュ、ナスカの地上絵、白銀のアンデス山脈、アマゾン川の町イキトス、南米最大の古代都市遺跡チャン・チャン、校友で天野博物館理事・学芸主任の坂根博氏が発掘している約4800年前のラス・シクラス遺跡など、見どころがたくさんあります。ぜひ、ペルーにいらしてください。

ラテンアメリカ大好き人間、特にペルーを愛する人間の1人として、1人でも多くの校友にペルーを見てもらいたいと思います。

清水達也(1966年政経)



リマ稲門会創立40周年

リマの魅力

南米一のグルメの町ともいわれるリマ市。隣国チリなどでは、リマへの週末グルメパック旅行が人気だ。魚介類には特に恵まれている。

各国料理のレストランのほか、日本料理レストランも20軒ほどある。特筆すべきは、日本料理の食材も日本からの輸入ではなく、ペルー産が数多く出回っていること。納豆、豆腐、味噌、醤油、漬物もペルー産があり、近隣諸国の駐在員がリマに買い出しに来るほど。



ペルー名物料理「セビチェ」

娯楽ではカラオケ店が約10軒。ゴルフやテニスは料金も比較的安く、降水量が少ないので雨を気にせずプレーできる。

リマは恵まれた気候や充実した日本食の供給などにより、日本人駐在員には非常に住みやすい都市だという評価を得ている。



リマ市。太平洋に臨む恋人たちの公園